



COMPAÑÍA NACIONAL DE **DANZA** DE ESPAÑA

DIRECTOR ARTÍSTICO **JOSÉ CARLOS MARTÍNEZ**

スペイン国立 ダンスカンパニー

COMPAÑÍA NACIONAL
DE **DANZA** DE ESPAÑA

DIRECTOR ARTÍSTICO **JOSÉ CARLOS MARTÍNEZ**
芸術監督 ジョゼ・マルティネズ



photo: Jacobo Medrano



愛知公演

2014 11.30(日) 15:00 愛知県芸術劇場大ホール

〔主催〕愛知芸術文化センター愛知県芸術劇場(公益財団法人愛知県文化振興事業団) 〔共催〕中日新聞社／東海テレビ放送

〔助成〕平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

神奈川公演

12.5(金) 19:00 6(土) 15:00 KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

〔主催〕KAAT神奈川芸術劇場

〔企画制作〕愛知県芸術劇場／KAAT神奈川芸術劇場

〔協賛〕チャコット株式会社／Rivera Japan(株式会社リベラジャパン)／Sant Aniol

〔協力〕ベルチェアソシエイツ 〔後援〕スペイン大使館

photo: Emilio Tenorio



GREETINGS

photo: Emilio Tenorio

本日はスペイン国立ダンスカンパニー公演にご来場いただき、誠にありがとうございます。

本公演は、パリ・オペラ座バレエ団の元エトワール、ジョゼ・マルティネス氏が芸術監督に就任して初の来日公演となります。

イリ・キリアン、ウィリアム・フォーサイス、オハッド・ナハリンといった巨匠振付家の名作を一挙3作品上演するほか、本格的なアンサンブル作品としては日本初上演となる世界的な振付家イジック・ガリーリの代表作『Sub』をご紹介します。

就任以来、わずか2年の間でここまで充実したレパートリーを揃えたマルティネス氏の芸術監督としての成果と、鍛えあげられたダンサーたちによるエネルギッシュなパフォーマンスをご覧いただくと共に、同時代に活躍を続ける世界的振付家たちの作品を通じて、現代のダンスシーンを一望いただける貴重な機会になることでしょう。

また、昨年のパリ・オペラ座バレエ団日本公演で大絶賛を浴びたマルティネス振付『天井桟敷の人々』のパ・ド・ドゥでは、本人もダンサーとして登場。日本公演のために特別に用意されたこの作品は、パリ・オペラ座バレエ団以外では初上演となります。全5作品、日本ツアーのための特別プログラムをどうぞお楽しみください。

本公演は愛知県芸術劇場とKAAT神奈川芸術劇場との共同招聘事業として企画制作されました。両劇場とも、今後各地の劇場と連携することで、多くの方々により上質な舞台をお届けすることを目指してまいります。

最後になりましたが、公演の実現にご協力を賜りましたすべての皆様に心から厚く御礼を申し上げます。

愛知県芸術劇場・KAAT神奈川芸術劇場



モンセラ・イグレスias・サントス

スペイン国立音楽・舞台芸術機関 INAEM総裁

En los últimos 35 años la Compañía Nacional de Danza (CND) ha logrado proyectar la danza, uno de los más preciados bienes de el patrimonio cultural español, dentro y fuera de nuestras fronteras. Al reconocimiento unánime de esta institución han contribuido todas las personalidades de la danza que han pasado por esta compañía y han dedicado su tiempo y energías a hacerla más grande. Desde Víctor Ullate o Nacho Duato, hasta su director actual José Carlos Martínez, pasando por María de Ávila o Maya Plisetskaya.

La CND quiere emprender hoy una nueva etapa, liderada por José Carlos Martínez, para convertirse en una compañía homogénea de amplio repertorio, en la que tengan cabida distintas técnicas y propuestas artísticas, para ejercer de nexo entre tradición y vanguardia, reservando un amplio espacio a la nueva creación española, sin olvidar a los maestros de siempre y a los grandes coreógrafos de hoy.

Las dos actuaciones que tiene previsto llevar a cabo la CND en Japón, en las ciudades de Nagoya y Yokohama, suponen un orgullo para este Ministerio y una alegría para todos los que forman parte de la compañía. Disfruten de la experiencia irrepetible de descubrir o visitar grandes coreografías servidas desde la honestidad y la calidad.

これまでの35年間スペイン国立ダンスカンパニーはスペインの文化芸術を代表するダンスを国内外で広めてまいりました。その間、カンパニーが絶大な信頼を得るまで、関わったすべてのダンサーが時間とエネルギーを費やし、今の地位を確立することに貢献しました。ヴィクトール・ウラテやナチョ・ドゥアト、現在の芸術監督であるジョゼ・カルロス・マルティネズ、マリア・デ・アヴィラやマイヤ・プリセツカヤに至るまで皆、ご尽力くださいました。

スペイン国立ダンスカンパニーは今日新たな思いでステージに立ちます。ジョゼ・カルロス・マルティネズを芸術監督に迎え、幅広いレパートリーを持つカンパニーとして、異なる技術や新しい舞台を提案、伝統と斬新さを一つにし、過去の巨匠や現代の偉大なる振付家たちの才能を忘れずにスペインの新たな創造性を見出しています。

このたびスペイン国立ダンスカンパニーが名古屋と横浜で開催します公演は、我々にとって大変光栄なことであり、カンパニーのメンバーにとっても喜ばしいことです。またとないこの機会に、観客の皆様には、その高い表現力とありのままの姿をぜひ感じ、再発見できますことを願っております。

Montserrat Iglesias Santos

Directora general del INAEM

サンチアゴ・エレロ・アミーゴ

駐日スペイン大使館 文化担当参事官

Deseo ofrecer mi más sincera felicitación como Consejero Cultural de la Embajada de España en Japón a la Compañía Nacional de Danza de España con ocasión de su gira 2014 en Japón durante los días 30 de noviembre en Aichi, y 5 y 6 de diciembre en Kanagawa.

Quiero asimismo agradecer al Director Artístico José Carlos Martínez y a toda su Compañía la labor que con tanto empeño e ilusión están realizando, la cual está contribuyendo de forma notable a conseguir una mayor difusión de la danza española en Japón.

Tengo la certeza de que, una vez más, el público japonés podrá disfrutar de un espectáculo del más alto nivel, como solo la Compañía Nacional de Danza de España -seguramente la mejor representante de la cultura de España a nivel internacional- puede lograr.

駐日スペイン大使館文化担当参事官として、11月30日に愛知県にて、12月5日、6日に神奈川県にて開催されますスペイン国立ダンスカンパニーの2014年日本公演に際し、お祝いの言葉をお贈りすることができますことを大変嬉しく思います。

また芸術監督のジョゼ・カルロス・マルティネズ氏やダンスカンパニーの皆様にも、本公演にかけるその情熱と弛まない努力に感謝の意を申し上げます。彼らの貢献により、日本においてスペインダンスは広く普及しております。

日本の観客の皆様には、世界においてスペイン文化を代表する第一人者であろうスペイン国立ダンスカンパニーの素晴らしい踊りを十分にご堪能いただけることと確信しております。

Santiago Herrero Amigo

Consejero Cultural



José Carlos Martínez

Director Artístico
Compañía Nacional de Danza de ESPAÑA

Es un placer para mí viajar una vez más a Japón, un país ligado desde hace años a mi trayectoria, que siempre me ha tratado con muchísimo cariño, admiración y respeto.

En esta ocasión el público que tantas veces me ha visto bailar tendrá ocasión de conocer mi trabajo de director al frente de la Compañía Nacional de Danza de España.

He elegido un programa con grandes nombres de la coreografía y propuestas llenas de fuerza, plasticidad, elegancia y excelencia.

La CND llega a Japón con piezas de Willian Forsythe, Itzik Galili, Jirí Kylián y Ohad Naharin, cuatro nombres fundamentales en la historia de la danza del siglo XX.

También tendré el gusto de volver a presentar un fragmento de mi coreografía Les Enfants du Paradis, que los japoneses ya disfrutaron, en su momento, de la mano del Ballet de la Ópera de París.

Gracias al apoyo que nos brinda la Fundación Loewe, patrocinador desde 2013 de la CND, podemos hacer realidad este viaje a Japón con una compañía versátil que abarca un repertorio diverso, arriesgado y exigente. La Fundación comparte conmigo la convicción de la que educación es la base de las generaciones futuras de la danza y de la creación de nuevos públicos y por ello ha promovido recientemente importantes acciones dentro del programa pedagógico y educativo de la CND .

Es un lujo para nuestra compañía volver a Japón y bailar para un público entendido y entusiasta que, estamos convencidos, sabrá apreciar la propuesta que pondremos encima de sus escenarios.

José Martínez

日本の皆様にもまたお会いできますことを嬉しく思います。私の人生において日本は昔から繋がりのある国であり、尊敬や敬意の気持ち、人の温もりを常に感じられる国でもあります。

これまで幾度となく私の踊りを見てくださった方たちには、今回スペイン国立ダンスカンパニーの芸術監督としての仕事をお見せすることになります。

著名な振付家の作品を組み込んだプログラムは、圧倒的な存在感、豊かな表現力、エレガンス、崇高さなど、充実したものになっております。今回スペイン国立ダンスカンパニーは20世紀ダンスの歴史を語るには欠かせない、ウィリアム・フォーサイス、イジック・ガリリー、イリ・キリアン、オハッド・ナハリンという4名の作品を掲げて来日します。

またパリ・オペラ座バレエ団在籍時にも日本の皆様にも紹介しました、私の振付作品『天井桟敷の人々』の一部もお見せしたいと思っております。

2013年からご支援いただいておりますロエベ財団のおかげで、この多才なカンパニーの来日が実現し、変化に富んだ、大胆かつレベルの高いプログラムをご用意することが出来ました。ダンスの将来を担う次世代の若者を育てることや新たな観客を見出すことがいかに大切かという私の理念を当財団も共有しており、スペイン国立ダンスカンパニー内の教育プログラムの改革にも今着手しております。

また日本で公演を行えますことは大変光栄であり、熱心な日本の観客の皆様には、この舞台で見せる意気込みを必ず感じていただけたと思います。

ジョゼ・カルロス・マルティネス
スペイン国立ダンスカンパニー 芸術監督



ジョゼ・マルティネス

José Carlos Martínez

1969年スペイン・カルタヘナ生まれ。ピラール・モリナのもとでバレエを始め、84年よりカンヌのロゼラ・ハイタワー・バレエ学校にて学ぶ。87年、ローザンヌ国際バレエコンクールにてローザンヌ賞を受賞し、パリ・オペラ座バレエ学校に入学。88年、当時の芸術監督ルドルフ・ヌレエフによりパリ・オペラ座バレエ団に入団。92年、ヴァルナ国際バレエコンクール シニア部門にて金賞を受賞。97年5月27日、エトワールに任命される。

主な受賞・受章歴は、カルボー賞、レオニード・マシーン賞、スペイン・ナショナル・ダンス賞、フランス／中国賞、自らの振付作品『天井桟敷の人々』に対して贈られたブノワ賞、バレンシア・ダンス賞、芸術文化勲章オフィシエ。

ダンサーとしてはクラシック、ネオクラシック・バレエが特筆される一方、20世紀を代表する振付家であるベジャール、バウシュ、エック、フォーサイスらの作品も数多く踊っている。また、ゲストダンサーとして各国の主要バレエ団への出演も多数。

振付作品としては、『ミ・ファヴォリータ』（2002年）、『ドリーブ組曲』（03年）、パリ・オペラ座バレエ学校のために振り付けた『スカラムーシュ』（05年）、『括弧1』（05年）、『ソリ・テール』（06年）、『不在の香り』（07年）、パリ・オペラ座バレエ団のために振り付けた『天井桟敷の人々』（08年）、『二つの動きのオーバーチュア』（09年）、『スカララッティ・パド・ドゥ』（09年）、上海バレエ団に振り付けた『マルコ・ポーロ』『ラスト・ミッション』（10年）、スペイン国立ダンスカンパニーのために振り付けた『ソナタ』（12年）、『ライモンダ・ディベルティスマン』（13年）、『ジゼルのパド・ドゥ』（13年）などがある。

11年9月、スペイン国立ダンスカンパニーの芸術監督に就任。

1979年創立のスペイン国立ダンスカンパニーは、芸術監督と名称を変えつつ存続し、今シーズン35周年を祝う。設立時の名称は「国立クラシコバレエ団」(クラシコは英語「classic」の意)、初代芸術監督は若くしてモーリス・ベジャールに認められ20世紀バレエ団で活躍したヴィクトール・ウラテ [1947〜]。1983年に、バルセロナのリセウ大劇場バレエ団の第一舞踊手を務めたのちウラテやアナ・ラグーナ (後のマッツ・エックのミューズ) を教えたマリア・デ・アヴィラ [1920〜2014] が芸術監督となり、1986年までバランシンやチューダーらのバレエ作品を上演し、スペインの若手振付家にも道を拓いた。その後1年間シュツットガルト・バレエ団等で踊ったアメリカ出身のレイ・バーラ [1930〜] が引き継ぎ、1987年にロシアの名バレリーナ、マイヤ・プリセツカヤ [1925〜] が任命される。この時代にはカンパニー名は「国立リリコバレエ団」(リリコは英語の「lyric」の意)に変更され、古典バレエが多く上演された。そして1990年、イリ・キリアン率いるネザーラ

ンド・ダンス・シアターでダンサー・振付家として活躍していたスペイン出身のナチョ・ドゥアト [1957〜] が芸術監督に就任、名称は現行の「国立ダンスカンパニー」となった。2010年までカンパニーを率いたドゥアトは、20年間に45作品を振り付けた。トウ・シューズを廃し、ネオクラシック・バレエの巨匠キリアンの教えを独自に発展させて、流れる動きと独創的な身振りで濃密なスペイン的情念を表現する深い精神性を湛えた数々の名作は、カンパニーの名を世界に知らしめた。

2010年のドゥアト辞任後は1年間エルヴェ・パリトが芸術監督を務め、満を持して2011年に新芸術監督の座に就いたのが、同年にパリ・オペラ座バレエ団エトワールを引退したジョゼ・マルティネスである。卓越した技術、優雅さもユーモアも自在な演技力を備えたダンサーであり、深い知見と柔軟な感性でパ・ド・ドゥから全幕バレエまで振り付ける術を知る振付家として評価の高いマルティネスの起用により、カ

ンパニーはドゥアト時代のネオクラシック路線から、コンテンポラリーダンスから古典バレエまでの上演が可能な多面的な魅力を持つカンパニーへと方向転換したのである。

実は、19世紀を通してフランス、ロシアで完成され今日まで伝えられている古典バレエは、スペインにおいてこれまで十分に顧みられない領域だった。こうしたバレエの源流であるルネサンス期の宮廷舞踊は、スペインでは16世紀から実践されていたが、次第にスペイン各地の民族舞踊と混ざり合い、今日「エスクエラ・ボレラ」と呼ばれる舞踊に発展した。加えて「クラシコ・エスパニョール」(クラシック音楽を用いフラメンコにバレエのテクニクが入る)、フォルクローレ (各地の民族舞踊)、フラメンコが、スペイン舞踊の4本の柱を構成する。このように、すでに豊かすぎるほどのダンスの伝統が存在していたためか、スペインではバレエが舞台上演されるダンスの支配的位置を占めることはなかった。1847年にオペラ、バレエを上演する壮麗なりセウ大劇場が開場した時も、付属



バレエ団は外国人ソリストを集めたバレエ部門と、スペイン人によるエスクエラ・ボレラ部門に分かれていた。今日スペインの国立舞踊団には「スペイン国立ダンスカンパニー」と「スペイン国立バレエ団」[1978年創立]が存在しているが、後者は「バレエ」の語から一般に想像するトウ・シューズを履いたダンスは踊らず、上述したスペイン伝統舞踊をレパートリーとする舞踊団である。

スペイン伝統舞踊とネオクラシック・バレエの間で、20年余り続いていた古典バレエの空位を埋めること、それは確かにバレエの殿堂パリ・オペラ座バレエ団で頂点を極めたマルティネスに期待されたことだった。だが彼の計画は、古典、ネオクラシックのバレエに留まらず同時代の優れた振付家の新作を上演し、ダンスの魅力をより多くの人々に伝えることだという。こうしてレパートリーには、スペイン内外の新進振付家の意欲作、キリアン、フォーサイスら現代バレエ界の巨匠の作品、そしてマルティネス振付の『ドリーブ組曲』『スカラッ

ティ・パ・ド・ドゥ』、古典の名作『ジゼル』等が並ぶ。トウ・シューズ導入に際して古典バレエへの急転換を危惧したダンサーの抵抗には、トウ・シューズを履かないダンスも含めた幅広い作品上演と平等なチャンスを約束し、新芸術監督はカンパニーをまとめていった。ダンサーの個性を考慮しつつレパートリーの充実を図る彼の方針は、この日本ツアーの演目からも実感されるだろう。大地を震わせる力強さの男性たち、母性と魔性を含め持つ官能的な女性たちは、スペインの血に近いエネルギーを感じるとマルティネスが言うイスラエルの振付家の作品や、抒情的なバレエに独特の味わいを与えている。

広大なダンスの時空を視界に収める芸術監督のもと、舞踊大国育ちのダンサーが個性を輝かせる新生スペイン国立ダンスカンパニー。期待は高まるばかりである。

スペイン国立ダンスカンパニーの軌跡と今

文◎岡見さえ(舞踊評論家)

Text by Sae Okami



José Carlos Martínez

世界のダンスの交差点になる意志

文◎三浦雅士(文芸評論家) *Text by Masashi Miura*

ジョゼ・マルティネズ、いやフランスからスペインに移った以上は今やホセ・カルロス・マルティネズというべきなのかもしれないが、とにかくマルティネズに関しては優しいというか包容力があるというか、そういう印象がとても強い。パリ・オペラ座で『天井桟敷の人々』を上演した直後、オペラ座の日本公演の時だったと思うが、わざわざ客席を探して私にそのDVDを手渡してくれたことがある。以前、全幕ものを振り付けることになったと聞いて、それはぜひ見たいと私が言ったのを忘れずに、初演の映像を届けてくれたのである。嬉しかった。配慮が細やかなのだ。

舞台から受ける印象もまったく同じ。今や前世紀末のことになってしまうが、フレッシュな新星として登場した時も、長身で思慮深げな面立ちにもかかわらず、全身からやわらかな優しさが漂い、組むことの多かったアニエス・ルテステュを優しく抱擁するように踊るその優しさがなんとも上品

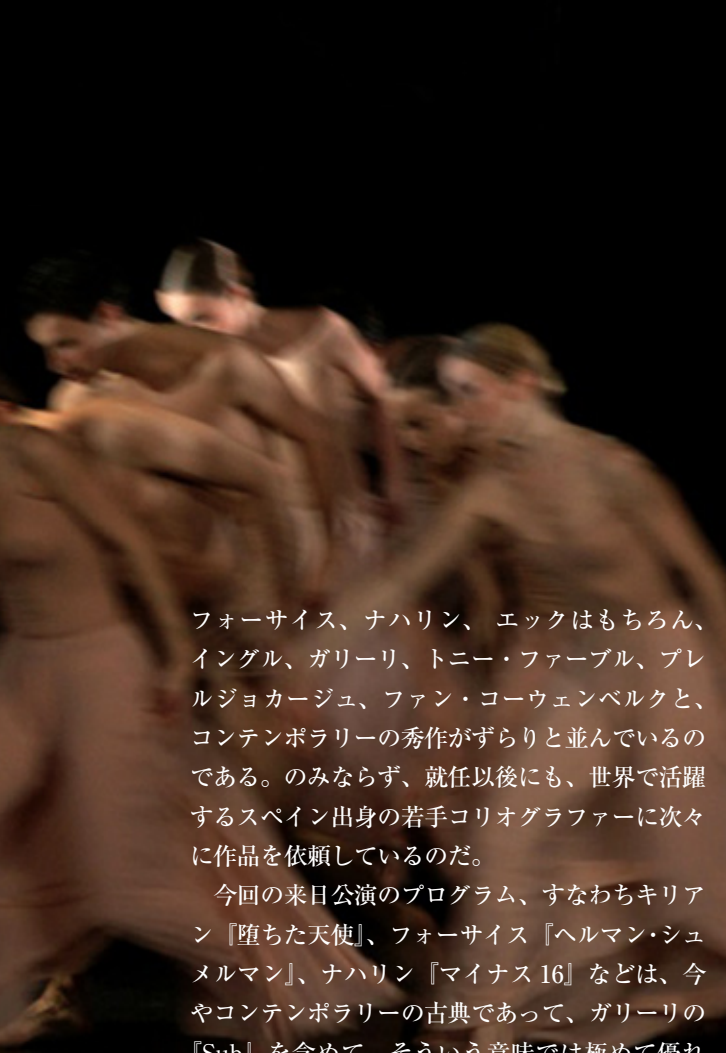
で、二人が登場すると舞台がそれだけで広く豊かになったような感じがした。二人が踊った『グラン・パ・クラシック』は今も記憶鮮明だ。自身が振り付けた『ドリーブ組曲』にしてもそう。幕が上がると男女が向こう向きに立っているという意表を衝く出だしたが、温かく優しいユーモアであって、これ見よがしのところがまったくない。

そんなわけで、長年ドゥアトのもとでモダン・バレエというよりはコンテンポラリー・ダンスを踊ってきたスペイン国立ダンスカンパニーの芸術監督に就任することが決まった時には、ちょっと心配になった。マルティネズがコンテンポラリーに合わないとは思わないが、パリ・オペラ座で培ってきた古典的なバレエの素養とどう折り合いをつけるのか、不安に思えたのである。『天井桟敷の人々』にしても、また、その後に上海バレエに振り付けた『マルコ・ポーロ』にしても、古典的なバレエ・テクニクを基礎にしている。対す



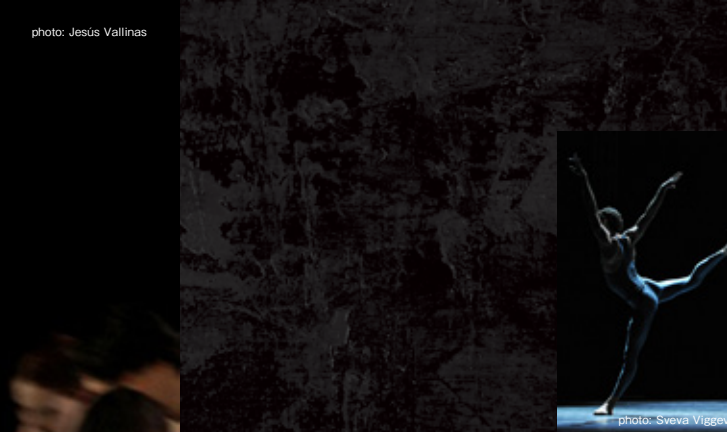
るに、ドゥアトのもとにあったカンパニーはトウ・シューズを脱ぎ捨てたカンパニーなのだ。両者をどんなふうに結びつけるのだろうか。

ところが、である。少なくとも私のもとにある情報を整理すると、マルティネズはまず、コンテンポラリーに対する敬意からその仕事を始めているとしか思えないところがあって、そのことにまず驚くことになった。レパートリーに、キリアン、



フォーサイス、ナハリン、エックはもちろん、イングル、ガリーリ、トニー・ファーブル、プレルジョカージュ、ファン・コーウェンベルクと、コンテンポラリーの秀作がずらりと並んでいるのである。のみならず、就任以後にも、世界で活躍するスペイン出身の若手コリオグラファーに次々に作品を依頼しているのだ。

今回の来日公演のプログラム、すなわちキリアン『堕ちた天使』、フォーサイス『ヘルマン・シュメルマン』、ナハリン『マイナス16』などは、今やコンテンポラリーの古典であって、ガリーリの『Sub』を含めて、そういう意味では極めて優れたコンテンポラリー・ダンス入門になっているのだが、サгалドイ&ブラヴォ『バビロン』、ベレ『デモデ』、セルド『イクストリームリー・クローズ』、アルケス『アンサウンド』、それにニュルンベルク・バレエに振り付けて話題になったゴヨ・モンテロの『ロミオとジュリエット』といったレパートリー



は、みな世界で活躍するスペイン出身の若手コリオグラファーの作品で、年齢もマルティネズと同世代かそれより若い。『日本国』なる作品を振り付けたモーロウなど32歳だ。イタリアやチリ出身のコリオグラファーの作品もあるが、彼らはスペイン国立のダンサーである。

ここにもマルティネズの優しさを私は感じる。故国から温かい手を差し伸べて若手を成長させたいというメッセージを感じてしまうのだ。だが、その優しさのために、コリオグラファーとしての自分を犠牲にしてしまうのではないか。少し心配になってくるが、日本ツアーの後に決まった中国ツアーのラインナップは、ナハリンの作品だけは同じだが、ほかは自身の振り付けた『ドリーブ組曲』と『ライモンダ・ディヴェルティスマン』、それにファーブルの『ホルベルク組曲』で、優しい感触も含めて、疑いなく自身の個性を打ち出す方向へと一歩踏み出しているのである。まずは



ディレクターに徹し、カンパニーの基礎を固めた後にコリオグラファーの仕事に手を広げたい。マルティネズは、就任が決まった直後の「ダンスマガジン・インタヴュー」でそう話していたが、自身のヴィジョンを着々と実現しつつあるといったいい。

それにしても、そのレパートリーの広げ方には驚かざるをえない。結果的に世界のダンスの現状を浮き彫りにしているからだ。じつによく見ていると思う。むしろ、クランコ、マクミラン、ノイマイヤーといった物語バレエの系譜に属する作品は皆無である。それはしかし、カンパニーがそこまで成長していないからではおそくない。いずれ自分が手掛けようと思っているからなのだ。『天井桟敷の人々』や『マルコ・ポーロ』の作風を考えれば、それは疑いないと私には思える。スペイン国立ダンスカンパニーが世界のダンスの交差点になる日も遠くはないという気がしてくる。

『Sub』〈日本初演〉

振付: イジック・ガリーリ

音楽: マイケル・ゴードン “ウェザー・ワン”

『堕ちた天使』

振付: イリ・キリアン

音楽: スティーヴ・ライヒ “ドラミング・パートI”

『ヘルマン・シュメルマン』

振付: ウィリアム・フォーサイス

音楽: トム・ウィレムス “ジャスト・ダッキー”

『天井桟敷の人々』

第2幕／第5場よりパ・ド・ドウ&ソロ

振付: ジョゼ・マルティネズ

音楽: マルク=オリヴィエ・デュパン

『マイナス16』

振付: オハッド・ナハリン

音楽: コラージュ (ディーン・マーティン ほか)

“Sub”

Choreography: Itzik Galili

Music: Michael Gordon “Weather One”

“Falling Angels”

Choreography: Jiří Kylián

Music: Steve Reich “Drumming /Part 1”

“Herman Schmerman”

Choreography: William Forsythe

Music: Thom Willems “Just Ducky”

“Le Enfants Du Paradis”

ACTE II / SCÈNE5 pas de deux, solo

Choreography: José Martinez

Music: Marc-Olivier Dupin

“Minus 16”

Choreography: Ohad Naharin

Music: Collage

Sub

Choreography: Itzik Galili

Music: Michael Gordon “Weather One”

Costumes: Natasja Lansen

Lighting design: Yaron Abulafia

Staging: Leonardo Centi

World Premiere: Theater Bellevue Amsterdam(2009)



photo: Jacobo Medrano

イジック・ガリーリ振付『Sub』〈日本初演〉

PROGRAM



イジック・ガリーリ(振付家)

Itzik Galili

1961年、イスラエル・テルアビブ生まれ。バットドル舞踊団、バットシェバ舞踊団に参加。『ダンス・ヨーロッパ』誌に“身体における空間と時間の巧みな構成家”と評され、一躍世界に躍り出る。

90年、最初の作品『ダブル・タイム』を創作。同年、グヴァニム国際振付コンクールで創造賞を受賞。92年『バタフライ・エフェクト』でオランダの振付家のための国際コンクールにて観客賞を受賞し、国際的注目を集める。振付家となりわずか4年で、オランダ文化に寄与した功績を称えフィリップ・モリス・アート・プライズを授与される。これら三つの成果は、『ヒトウィーンし…』(95年)、『アンティル・ウィズ／アウト・イナフ』(98年)、『酔いどれの庭』(99年)、『美しきあなた』(99年)、『誰にも言ったことがないこと』(2000年)、『お願いだから』(01年)、『Xの下に見よ』(03年)をはじめとする40作品以上の創作活動の始まりであった。

彼の作品は、オランダ国立バレエ団、ネザーランド・ダンス・シアター、グレンベンキアン・バレエ団、ジュネーブ大劇場バレエ団、バットシェバ舞踊団、シュツットガルト・バレエ団、レ・グラン・バレエ・カナディアンズを含め、世界各地の著名なカンパニーによって上演されている。

02年、オランダにおける長きにわたるダンスの功績を称え、オランダ・コリオグラフィー・アワード2002を受賞し、歴代の受賞者ハンス・ファン・マーネン、イリ・キリアン、クリスティナ・ドウ・シャテルと名を連ねた。

創作活動は今なお留まることを知らず、「我々は皆、狂人であるが、我々は皆、そうでないと思っている」という印象的な言葉を述べている。

イジック・ガリーリとの出会い

文◎柳本雅寛(+81主宰 ダンサー・振付家)

Text by Masahiro Yanagimoto

2002年の2月頃だったと思う。当時ドイツ・ミュンヘンで踊っていた僕は新境地にオランダを選びオーディションを受けに来ていた。アーネムという街で連れの友人に言われるまま、どこのカンパニーかも知らず公演を観に行った、それがガリーリ・ダンス・カンパニーだった。

客席に座り、なんの情報もないまま静かに客電が落ちていくと「……ドスッ……ドスッ……」と鈍い音が一定間隔で暗闇の中から聞こえてくる。ゆっくりと舞台の前面のサス(サスペンションライト)が入ると、二人のダンサーがカジュアルな格好で無表情に自分たちの胸を両手で打ち付けている音だと気づく。客席から失笑がもれる。

やがて二人は服を脱ぎ出し肌を直接打ち続ける、一定間隔で……

客席から笑いが起こる。

ちなみに2年後にこのグループに入り、この作品のそのパートを自分がやることになるとは微塵も考えていなかった。裏話だがこの頃は実に12分(!)彼らは身体を打ち続ける(僕の時は8分になっていた)。

二人のダンサーはいつの間にかパンツ一枚になり真っ赤になった身体をひたすら打ち続ける。観客は不穏な、あるいは不愉快な空気に包まれる。すでに二人のダンサーはトランスの状態。

「もうやめてくれ……」誰もがそう感じたその瞬間、始まった!

十数個のパーカッションが鳴り響き、爆発的なダンス。十人のダンサーたちが入り乱れ、祈りに近い群舞、いつの間にか二人も飲み込まれ共に踊り狂う。

観客は息をのみ、そこに安堵と興奮を感じる。

昇天の瞬間をそこにみた。

イジックは上手いダンスには興味がない、彼は表現を演じることを嫌う。

そんな振付家である。

2004から06年の2年間、ガリーリ・ダンス・カンパニーに在籍した。彼自身素晴らしいダンサーであったが、膝を痛め舞台に立つことをやめた。振付は彼が創ることもあったが多くのダンサーたちでムーブメントを創作する。彼はその素材を使い、装置、照明、衣裳を駆使して作品を組み上げる演出家である。

半年ほど前に彼とイスラエルで再会したが、もうカンパニーを持つことはやめ、今はフリーで世界中を飛び回っていると言っていた。

今日、コンテンポラリー・ダンスという名の下に世界中で、そしてここ日本でも多くの優れた表現者が新たな境地を模索している。

彼の作品が紹介されることを嬉しく思う。舞台上でのみ起こる、二度とは再現はできない“リアル”の目撃者となる皆様が、素敵な想像の旅に誘われることを願います。



Sub

Choreography: Itzik Galili



Sub

Choreography: Itzik Galili

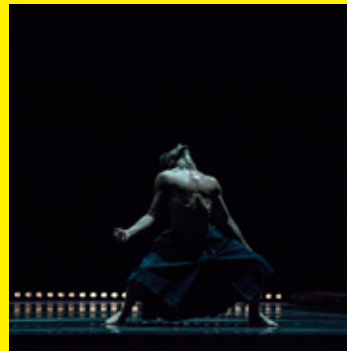


photo: Jacobo Medrano



Choreography: Jiří Kylián

Music: Steve Reich "Drumming /Part 1"

Costumes: Joke Visser

Set design: Jiří Kylián

Lighting design: Joop Caboort

Staging: Roslyn Andersson

World premiere: Nederlands Dans Theater
at the AT&T Danstheater de la Haya (1989)

Falling Angels

photo: Jacobo Medrano

イリ・キリアン振付『堕ちた天使』

イリ・キリアンは、「モダンバレエ」と呼ばれていたベジャールやプティ等の新しいバレエの試みからコンテンポラリー・ダンスへの橋渡しをし、かつ自らもオランダを代表するネザーランド・ダンス・シアターの芸術監督として世界のダンスシーンを牽引し続けたマスターの一人だ。

日本での人気も高く、毎年のように来日していた時期もあった。日本人アーティストとのコラボレーションも多々あり、日本に滞在して作品も作っている。芸術監督を退いた後も昨年のあいちトリエンナーレ2013では津波をモチーフにした作品『イースト・シャドウ』で再び深い感動を呼んだ。

この『堕ちた天使』は『ブラック＆ホワイト』という長編作品のシークエンスの一つを独立させたもので、8人の女性ダンサーが手足を剥き出しにした黒いレオタードで踊る。これは男性ダンサーがマッチョに踊る『サラバンド』というシーンと好対照を成しているものである。

キリアンは作品数が多く、スタイルも多彩なため、一概に「これがキリアン」とは言いづらい。だがまずは、しっかりとしたバレエを基礎としていることは共通している。しかもダンサーには極めて柔軟に優美に、そして時にはコミカルにバレエというテクニックを使いこなす力が要求される。

またどの作品においても、音楽と身体の関わりが非常に密接だ。今作で使うのはミニマル・ミュージックの巨匠スティーブ・ライヒの「ドラミング」。これはガーナで古くから儀式などで使われてきたパーカッションをベースにしている。途切れなく続く音を基調にしながら、時に違うテンポを重ねていくことで、まるで波長の違う波が寄り添っては離れていくような不思議な効果が味わえるだろう。

「堕ちた天使」とは何か……というタイトルの解説は無粋なものだが、「女性が天使のように完全さ・純粋さを持っていたとしても、現実社会では精神的・肉体的・社会的など様々な制約で、本来の素晴らしさを発揮できないでいる」と見ることもできよう（時に妊娠等を思わせる演出もある）。

しなやかで豊かな身体は、全体に大きなうねりをもって無条件に観客の意識を掴んで離さないだろう。もちろんそれは単調な音ハメになることなく、独自の律動が舞台空間を波打たせるのだ。時にダンサーは背を丸め、床に転がり、そして闇に消えていく。舞台上には白と黒以外の色はない。だが極めて豊かな色彩が、観客の網膜には浮かんでくるはずだ。

文◎乗越たかお(作家・ヤサぐれ舞踊評論家)

Text by Takao Norikoshi



photo: Emilio Tenorio (左)
photo: Jacobo Medrano (中・右)



イリ・キリアン(振付家)

Jiří Kylián

1947年、チェコスロバキア・ブラハ生まれ。ブラハの国立バレエ学校、ブラハ・コンセルヴァトワールを経て、英国ロイヤル・バレエ学校入学。68年ジョン・クランコ率いるシュツトガルト・バレエに入団、振付家としての活動を開始する。75年ネザーランド・ダンス・シアター（NDT）の芸術監督に就任。78年に若いダンサーのためのカンパニー NDT IIを、91年には40代以上のダンサーのための NDT IIIを作るなど、ユニークなカンパニーの形態を編み出した。99年に芸術監督を退いた後も10年間、常任振付家としてNDTに携わった。

これまでに100作近い作品を、NDTのほかシュツトガルト・バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団、東京バレエ団など、世界中のカンパニーのために創作している。

他分野の優れたアーティストとの仕事も数多く、作曲家のアルネ・ノールハイム（『アリアドネ』97年）、武満徹（『ドリームタイム』83年）、デザイナーのウォルター・ノブ（『シンフォニエッタ』78年）、ビル・カツツ（『詩篇交響曲』78年）、ジョン・マクファーレン（『忘れられた土地』80年）、マイケル・サイモン（『ステッピング・ストーンズ』91年）、北川原温（『ウィン・オブ・ア・カインド』98年）、新宮晋（『トス・オブ・ア・ダイス』2005年）、菱沼良樹（『渡り鳥』09年）などが挙げられる。06年には映像作家ボリス・バヴァル・コネンと『カー・メン』を創作。故郷チェコの炭鉱という“場所”に振り付けた作品として耳目を集めた。

主な受賞・受章歴は、オランダ王国オラニエ・ナッソー勲章、ニジンスキー賞3賞（モンテカルロ）、プノワ賞（モスクワ／ベルリン）、チェコ大統領より「名誉のメダル」、レジオン・ドヌール勲章（フランス）など。

Falling Angels

Choreography: Jiří Kylián



Herman Schmerman

Choreography: William Forsythe

Music: Thom Willems “Just Ducky”

Costumes: William Forsythe and Gianni Versace

Set design: William Forsythe

Lighting design: William Forsythe

World Premiered: New York City Ballet, Diamond Project at New York State Theater (1992)

ウィリアム・フォーサイス振付
『ヘルマン・シュメルマン』

photo: Jesús Vallinas



photo: Emilio Tenorio

ウィリアム・フォーサイス (振付家)

William Forsythe

1949年、アメリカ・ニューヨーク生まれ。ジョフリー・バレエ団を経て、シュツットガルト・バレエ団で踊ったのち、76年同団の常任振付家となる。振付家として在籍した7年間の中で、ミュンヘン、デン・ハーグ、ロンドン、バーゼル、ベルリン、フランクフルト、パリ、ニューヨーク、サンフランシスコなどのバレエ団やアンサンブルで振付を行う。84年、フランクフルト・バレエ団の芸術監督に就任。20年間の在任中に『アーティファクト』(84年)、『インブレッシング・ザ・ツァー』(88年)、『肢体の原理』(90年)、『失われた委曲』(91年、トム・ウィレムス音楽、イッセイ・ミヤケ衣裳)、『ALIE/NA(C)TION』(92年)、『エイドス：テロス』(95年)、『エンドレス・ハウス』(99年)、『カマー／カマー』(2000年)、『デクリエーション』(03年)などを創作。

04年のフランクフルト・バレエ解散後、フォーサイス・カンパニーを設立。『ヘテロトピア』(06年)、『Yes we can' t』(08年)などを創作。同カンパニーは、ザクセン州、ヘッセン州、ドレスデン市、フランクフルト・アム・マイン市などの支援を受け、国内外で公演を行っている。

近年の作品はフォーサイス・カンパニーのみで上演されているが、初期の作品は、マリンスキー・バレエ、ニューヨーク・シティ・バレエ、サンフランシスコ・バレエ団、カナダ国立バレエ団、英国ロイヤル・バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団など世界各国の主要バレエ団のレパートリーとなっている。

主な受賞・受章歴は、ベッシー賞 (ニューヨーク／88、98、04、07年)、ローレンス・オリヴィエ賞 (ロンドン／92、99、09年)、フランス芸術文化勲章コマンドゥール (97年)、ドイツ殊勲十字章 (97年)、ベネツィア・ビエンナーレ金獅子賞 (10年) など。



当時フランクフルト・バレエ団の芸術監督であったフォーサイスによる、ニューヨーク・シティ・バレエ団委嘱作。1992年、「ダイヤモンド・プロジェクト（新作シリーズ）」の一部として、ウェンディ・ウェーランやのちにアメリカン・バレエ・シアターのプリンシパルとして活躍したイーサン・スティーフェルら5人のダンサーによって初演された。

初演後、フランクフルト・バレエ団のために大幅に改訂され、パ・ド・ドゥが作られ、1993年には英国ロイヤル・バレエ団で上演、シルヴィ・ギエム、ダーシー・バッセルらが踊っている。

題名はフィルム・ノワール風コメディ映画『四つ数えろ』（1982年、スティーヴ・マーティン主演）の中に出てきたフレーズから取られたという。フォーサイス自身「このバレエ自体何の意味も持たない。踊るための作品だ……」と語っている。

音楽はトム・ウイレムス。衣裳はヴェルサーチ。シンセサイザーの音に乗り、前半は黒い衣裳を着けた男性二人、女性三人が、縦横無尽に踊る。女性はポワント。クラシック・バレエのパを用いているが、パが有機的に繋がり、優美なラインを作り出していく古典バレエとは異なり、パとパの連なりの中に、歪められた、人工的な動きが入れられている。“優雅さ”や“調和”、といった古典バレエの特徴は、無機質で挑発的、ドラ

イな質感へと変化している。動きは舞台のあちこちで同時多発的に起こる。

後半は男女のダンサーによるパ・ド・ドゥ。二人は、支え合うのではなく、相手に挑み、せめぎ合う。唐突な動き、ぎりぎりのオフバランス、身体のパーツは連関なくばらばらに動き、ねじれ、軋み、歪む。身体それ自体が、ひねられ、ばらばらに解体されていくように見える。後半、女性が鮮やかな黄色のミニ・スカートに履き替えて出てくると、男性も上半身裸にミニ・スカートを履いて登場、どこかコミカルな空気が漂う中、相手の動きをなぞり、同調する動きが増えていく。

マルティネズによれば、「カンパニーのポワント回帰を象徴する作品」。スペイン国立ダンスカンパニー初演は1996年。カンパニーは長い間ポワントを用いた作品を踊っていなかったが、マルティネズが芸術監督に着任し、ポワントを再導入した。フォーサイス、バランシン、さらには古典作品まで、カンパニーのレパートリーは広がっている。

古典、コンテンポラリー、様々な教育ベースを持ったダンサーたちの高い身体能力が、作品をさらにスリリングなものにしてくれるだろう。

文◎守山実花(舞踊評論家)
Text by Mika Moriyama



Herman
Schmerman

Choreography: William Forsythe

Choreography: José Martínez

Music: Marc - Olivier Dupin

Adaptation: François Roussillon and José Martínez

Costumes: Agnès Letestu

Piano: Viktoria Glushchenko

World premired: the Paris Opera Ballet at Palais Garnier(2008)

Le Enfants Du Paradis

ACTE II / SCÈNE5 pas de deux, solo

ジョゼ・マルティネズ振付『天井桟敷の人々』第2幕／第5場より

ガランスとバチストのパ・ド・ドゥ
バチストの絶望のソロ

私の振り付けたバレエ作品『天井桟敷の人々』のパ・ド・ドゥを持って

再び日本公演を行うことは大いなる喜びです。

『天井桟敷の人々』はアデュー公演（オペラ座の最終公演）で踊った作品であり、

ダンサーとしての私にとっても非常に大切な作品です。

また同時に、今回スペイン国立ダンスカンパニーと共に

この作品を紹介できることを大変誇らしく思っています。

ジョゼ・マルティネズ

フランス映画史上に残るマルセル・カルネ監督『天上桟敷の人々』を題材に、当時現役エトワール・ダンサーだったジョゼ・マルティネズが振り付け、2008年パリ・オペラ座で初演された。

舞台となるのは1800年代初頭のパリ、芝居小屋の世界。内向的でナイーブなバントマイム役者バチストと、艶やかな女芸人ガランス、互いに惹かれ合いながらも、結ばれない二人を中心に、プレイボーイの舞台俳優フレデリック・ルメートル、ダンディな無頼漢ラスネール、ガランスに心奪われるモンレー伯爵、バチストを慕う座長の娘ナタリーらが入り乱れ、繰り広げられる群像劇だ。

映画のストーリーをほぼ忠実になぞった物語バレエだが、古典、モダン、コンテンポラリーと様々な振付スタイルが混在するのが大きな特徴。「私はこの作品を自分のスタイルだけで創ろうとは思いませんでした。形、状態や方向性が一つだけというのではなく、多様なスタイルのダンスを混在させることで、映画の色彩感を表現できるのではないかと考えたからです。バレエでは、踊りのステップが言葉です、

私の語彙の中から自由に選んで使い表現することが大事だと思います」

2013年に行われた日本公演を前にした取材で、マルティネズは語っている。

ステージとなるのは舞台機構だけではない。客席、さらには劇場のロビーを自由に使い、作品の舞台となる芝居小屋の雰囲気を観客に体感させる演出手法は、日本公演でも大いに話題を集めた。劇場全体が芝居小屋となり、私たち観客もまた作品の一部となっていくのだ。

初演では振付に専念したマルティネズだが、2011年の再演で、1日だけバチストを踊り、オペラ座に別れを告げた。振付家として大きな一歩を刻むと同時に、エトワールとしてのキャリアを締めくくったこの作品を、マルティネズは、自身のオペラ座での日々を象徴する作品として選んだ。今回の日本公演のために一部を特別に再構成しての上演となる。

予定されているのは、第2幕のクライマックスで踊られるバチストとガランスのパ・ド・ドゥ。別れを経て、それぞれのパートナーとの人生を歩んでいる二人が、歳

月を重ねて再び出会い、あふれ出す想いを重ね合う。二人の身体が織り成す無言の会話から、複雑な心の機微が浮かび上がってくる。別れを予見しながら、それでもなお愛し合うずにはいられない二人。愛の喜び、陶酔の瞬間にさえ、孤独感や寂寥感を漂わせた、哀しく美しいパ・ド・ドゥである。

文◎守山実花(舞踊評論家)

Text by Mika Moriyama



Minus 16

Choreography: Ohad Naharin

Music: Collage (*)

Costumes: Ohad Naharin

Lighting design: Avi Yona Bueno (Bambi)

Staging: Shani Garfinkel and Shahr Biniamini

World premiere: Netherlands Dance Theater II at 11 Nov 1999, Lucent Danstheater, Den Haag (1999)

*Music

It Must Be True performed by The John Buzon Trio. Written by Gus Arnheim, Harry Barris and Gordon Clifford. Used by permission with EMI Mills Music Inc.
Hava Nagila ©1963, ren. 1991 Surf Beat Music. All rights reserved. Written and arranged by Dick Dale under license from Surf Beat Music (ASCAP).
Echad Mi Yode'a Lyrics and Music Traditional. Arranged by The Tractor's Revenge (Green, Belleli, Leibovitch). Published by The Tractor's Revenge (Green, Belleli, Leibovitch).
Nisi Dominus, RV 608: IV. Cum Dederit (Andante) by Antonio Vivaldi performed by James Bowman, The Academy of Ancient Music and Christopher Hogwood.
Over The Rainbow by E.Y. "YIP" Harburg and Harold Arlen. Used by permission of EMI Feist Catalog Inc. One Hundred Percent (100%) ASCAP.
Hooray For Hollywood (Richard Whiting and Johnny Mercer) ©1937 (Renewed) WB Music Corp. (ASCAP) All rights reserved. Used by permission.
Written by John Mercer and Richard Whiting. Used by permission with Warner/Chappell Music.
Sway by Pablo Beltran Ruiz, Luis Demetrio, Traconis Molina, and Norman Gimbel; Words West LLC d/b/a Butterfield Music (BMI). All rights reserved.

オハッド・ナハリン振付『マイナス16』



オハッド・ナハリン (振付家)

Ohad Naharin

1952年イスラエルのキブツ・ミズラ生まれ。74年にバットシェバ舞踊団でダンスを学び始める。その年、同舞踊団を訪れたマーサ・グラハムに見いだされ、渡米。ニューヨークのグラハム舞踊団へ入団すると共に、アメリカ-イスラエル文化財団の奨学金を受け、スクール・オブ・アメリカン・バレエ、ジュリアード音楽院で学ぶ。バットドル・ダンス・カンパニーやモリス・ベジャール・バレエ団の公演に出演。

80年ニューヨークに戻り、平林和子のスタジオで振付家デビュー。その年、妻・梶原まり(2001年死去)とオハッド・ナハリン・ダンス・カンパニーを設立、国内外からの評価を得る。また、バットシェバ舞踊団、ネザーランド・ダンス・シアターなどで振付を行う。

90年バットシェバ舞踊団の芸術監督に就任。常任振付家としても活躍し、20作品以上を同舞踊団およびジュニアカンパニー、アンサンブルのために振り付けている。また、自らの10以上の作品を繋げ、再構成した集大成的作品『デカダンス』は今なお進化し続けている。

少年期より音楽教育を受けているその素養は、振付作品の音楽にもしばしば生かされている。実力ある作曲家との共同制作も多く、オハッド・フィショフと制作したサウンドトラック『Three』(05年)、音楽とダンスによる作品『Playback』(04年)などがある。世界中のカンパニーから招聘されることも多く、ネザーランド・ダンス・シアター、フランクフルト・バレエ団、リヨン国立オペラ座バレエ団、スペイン国立ダンスカンパニー、クルベリー・バレエ団(スウェーデン)、フィンランド国立バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団など、著名なカンパニーに作品を提供している。

photo: Jacobo Medrano



Minus 16

Choreography: Ohad Naharin



コンテンポラリー・ダンスの隆盛を担ってきた中央ヨーロッパの勢いが一段落した1990年代、オハッド・ナハリンはバットシェバ舞踊団の芸術監督として衝撃的に登場した。それも中東のイスラエルという、ほぼノーマークの国からである。筆者もそうだが、その強靱でオリジナルにあふれた動きの数々は、閉塞感を突破して無限のダンスの可能性を改めて感じさせてくれたものだった。

なんといってもナハリンは、そもそも動きの発想からして異次元の清新さをもっていた。のちに独自の身体メソッド「GAGA」として結実していくナハリンのスタイルは、同じ動きでも質感が自由に変わっていくのである。たとえば腕一つ上げるのも「骨だけになった腕を上げる」と「皮膚が鉄のように硬くなった腕を上げる」というイメージでは、おのずと動きがもたらす質感が違ってくる。さらには腰を深く落として上半身の可動域を極めて広く使い、一瞬で方向転換してトップスピードに乗る。美しく伸びやかに、ではなく、刹那の跳躍で獲物に襲いかかる猫科の猛獣のようなのである。

『マイナス16』とは、ナハリンが他のカンパニーにレパートリーとして提供する時に使うタイトルだ。内容は、いわば「ナハリン作品のベスト版」といった趣きで、まことに贅沢な作品である。日本でもダンスファンの度肝を

抜いた『アナフェイズ』という作品からのセレクションが多い。それはナハリン自身も若く脂ののった時代の勢いにあふれている。

半円形に並べられた椅子に座り、イスラエルで「過ぎ越しの祭り」の時に歌われる数え歌が流れる中、端から撃ち抜かれるようにのけぞるダンサーたちが加速していく……というあまりにも有名なシークエンスも含まれている。またこれはネタバレになるので詳細は控えるが、観客と一体になる素敵で小粋なシーンも用意されている。

問題は、そういう独特のスタイルを持つナハリンの振付をスペイン国立ダンスカンパニーのダンサーが踊りこなせるのか？ということだ。実際あるバレエ団が本作を上演した時、十分な技術はありながら、まるやかすぎて物足りない時があった。しかし心配は要らない。ナハリンはこの作品をスペイン国立ダンスカンパニーに振り付けるにあたり、カンパニーのダンサーの動きに惚れ込み、特別に彼らのためだけに振り付けを追加したというのだ。いわばこれは「スペイン国立ダンスカンパニー スペシャル・バージョン」なのである。その魅力を、存分に味わいたい。



文◎乗越たかお(作家・ヤサぐれ舞踊評論家)

Text by Takao Norikoshi

Special MESSAGE

スペイン国立ダンスカンパニー来日公演によせて



©Elias

アニエス・ルテステュ
(元パリ・オペラ座 エトワール)

from
Agnès Letestu

親愛なる皆様

私は、ジョゼを友人として、また特別なパートナーとして長い間見てきました。公演で一緒に踊ることもたくさんありましたし、一緒に世界を旅してきました。私たちにあって日本は第二の故郷です。日本の観客の皆さんの情熱、愛、真心はずっとずっと私たちの心に残っています。人に愛され、リーダーシップも持ち合わせているジョゼが、今回、偉大な巨匠によるネオクラシック作品、コンテンポラリー・ダンスと、多岐にわたるプログラムの公演を成功させることは間違いありません。そして、スペイン国立ダンスカンパニーを日本に知らしめるだけでなく、クラシックを尊重しつつも、現代へそして未来へと目を向けている日本の観客の皆様の感性にぴったりと沿う舞台となることでしょう。

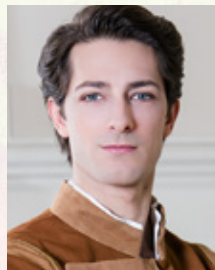
この素晴らしい公演と、ダイナミックなカンパニーの大きな成功を願って——ジョゼに寄り添いながら——。

Chers amis,

Je connais José depuis de nombreuses années en tant qu'ami et bien sur partenaire privilégié.nous avons parcouru le monde entier ensemble en dansant dans de nombreux spectacles et il est incontestable que le Japon est devenu comme une seconde famille pour nous deux.l'enthousiasme, l'amour et la fidélité que le public nous a communiqué et continue à nous manifester restera toujours dans notre cœur...

Je ne suis pas surprise que José,qui a toujours aimé guider et mener positivement les groupes, vienne présenter sa "Compañía Nacional de Danza" en tant que directeur artistique dans un programme composé de chorégraphies de grands maîtres aussi bien néo classiques que contemporaines, à l'image du goût du public Japonnais, respectueux de la tradition mais aussi tourné vers l'avenir et la modernité.

Je suis encore au côté de José pour lui souhaiter un grand succès ainsi qu'à sa dynamique compagnie pour cette belle série de spectacles....



©Agathe Poupeney

マチュー・ガニオ
(パリ・オペラ座バレエ団 エトワール)

from
Mathieu Ganio

スペイン国立ダンスカンパニーの日本ツアーが決まったと聞いて、大変嬉しく思っています。

公演の成功を祈っております。

私もこの公演を観たい!!

日本の観客の方々が羨ましいです。

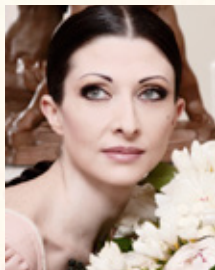
頑張って!

愛をこめて。

Cher José,

Je suis ravi d'apprendre ta tournée au Japon avec la compana nacional de danza, je te souhaite beaucoup de succes!! le public japonais a de la chance, j'aurais bien aime voir ces spectacles! Gambate

je t'embrasse,



©Michel Lidvac

イザベル・シアラヴォラ
(元パリ・オペラ座 エトワール)

from
Isabelle Ciaravola

親愛なるジョゼ

あなたが率いるバレエ団としての初来日公演を、心から応援しています。

あなたの作ったプログラムとあなたの大切なダンサーは、公演を大成功へ導いてくれることでしょう。

私たちは日本の観客の皆さんがダンスを愛し、いつも素晴らしいものを求めて止まないことをよく知っています。

卓越したダンサーであり、素晴らしい振付家であり、今や尊敬される芸術監督でもあるジョゼ。マジシャンのようなジョゼ。あなたはいつまでも心に残る公演を創り上げて、日本の皆さんに夢を見せるのですね。

大成功を祈って……。

あなたのお気に入り、イザ。

Mon José ,

Je suis de tout coeur auprès de toi pour cette première tournée au Japon avec ta compagnie. Je suis certaine que ta programmation ainsi que tes danseurs rencontreront un immense succès ! Nous connaissons tous deux le public Japonais, si amoureux de la danse et en quête d'excellence ! Et toi, monsieur le magicien , tour À tour sublime danseur, merveilleux chorégraphe et à présent directeur respecté, tu uras les faire rêver encore une fois , en leur faisant passer une soirée inoubliable ! Un immense toi toi ...

‘ Ta Favorite ’ Isa



スペイン国立ダンスカンパニー外観

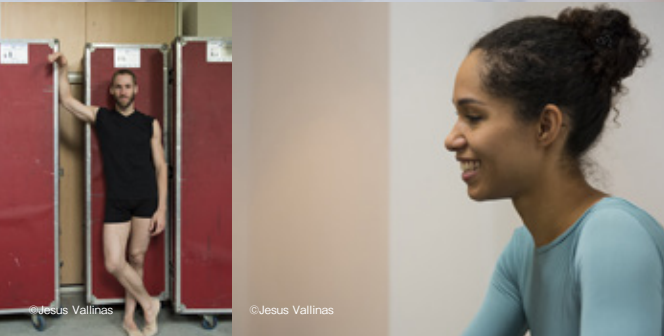
スペイン国立ダンスカンパニー

スタジオ訪問記

文・写真◎唐津絵理(愛知県芸術劇場シニアプロデューサー) Text by Eri Karatsu

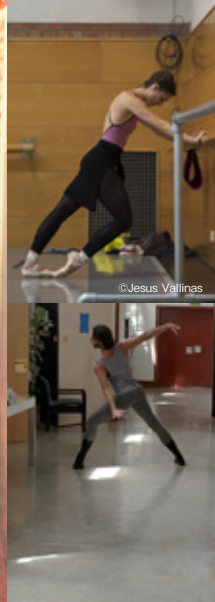


『ヘルマン・シュメルマン』リハーサル風景



©Jesus Vallinas

©Jesus Vallinas



©Jesus Vallinas



©Jesus Vallinas



リハーサルスタジオ ©Jesus Vallinas

2014年9月中旬、来日公演の打ち合わせのため、KAATのプロデューサーと二人、マドリッドにあるスペイン国立ダンスカンパニーのスタジオを訪れた。簡素な門をくぐり抜けると、そこには劇場らしきものの姿はなく、煉瓦造りの細長い建物がどこまでも続いている。煉瓦造りの建築物は元・屠殺場だという。現在その建物はリノベーションされ、カンパニーのリハーサル室兼事務所が入ったスタジオに生まれ変わっている。バリ・オペラ座バレエ団や新国立劇場等、よく知られた一国を代表するバレエ団のスタジオとは少しイメージの異なる空間ではあったが、足を踏み入れると一瞬にして、この場所こそ何よりもダンスを愛するダンサーや振付家が世界中から集まってくる「ダンスの楽園」なのだと、そう感じ取っていた。

何十メートルも続く細長い建築物は真ん中で二つに分かれており、向かって左側がアントニオ・ナハロ芸術監督率いるフラメンコのカンパニー〈Ballet Nacional de España〉、右側がジョゼ・マルティネス率いるダンスカンパニー〈Compañía Nacional de Danza〉の本拠地である。各カンパニーには舞台と同程度の広さのスタジオが2つずつあり、さらにこの建物は芸術監督室、衣裳室や舞台技術室、事務局等から構成されている。

マルティネスが芸術監督になって以来、ダンサーはバレエとコンテンポラリーの2グループに分かれたため、訪れた日のスタジオでは、古典バレエ『ライモンダ』とコンテンポラリー『ヘルマン・シュメルマン』の稽古が同時進行で行われていた。マルティネスは、これらのリハーサル現場を行き来し、さらにオフィスや舞台技術スタッフとの打ち合わせに取材対応と、一時の休みもなく目まぐるしく動き回っていた。その間にも、稽古中のダンサーに近づいていきアドバイスをしたり、さり気なく声を掛けたりと、常にすべてのダンサーやスタッフたちに気を遣い、丁寧に接している姿がとても印象的だった。

2日目には、2014/15シーズンの契約ダンサー43名の中から、日本公演でソリストを踊る6名のプリンシパルと1名のソリストにインタビューを行った。ダンサーたちか

らは、「ダンサー出身のマルティネスは、ダンサーの気持ちを受け止めて尊重してくれる」、「前に進むように背中を押してくれる」等、芸術監督への信頼を感じるコメントばかりだったが、それは一目瞭然、彼と数時間過ごせばすぐに理解できることだった。

ダンサーの出身国は様々で、現在は14ヶ国のダンサーが在籍。レパートリーの幅が拡大したことにより、世界中からここを目指すダンサーがやって来るようになったという。バリ・オペラ座時代、多くの作品を踊る中で築いてきた一流の振付家とのネットワークにより芸術監督就任わずか3年間で37作品もの多様なレパートリーをもつに至り、自分に合った作品を探すダンサーにとっても実に魅力あるダンスカンパニーへと変貌を遂げた。一方で、海外にいたスペイン出身のダンサーが自国で踊りたいと戻ってくるケースも増えており、スペイン国籍のダンサーの割合は全体の4割と一気に増大している。

公演は作品規模や内容に合わせて様々な劇場で上演されるという点もユニークだ。国が運営する複数の劇場のほか、現代作品ではマドリッド市のコンテンポラリー・アート・センター MATADERO等を使用することもあるという。日本に触発されて創作した『NIPPON-KOKU (日本国)』はこの劇場で世界初演を迎えた。

一般的な国立劇場のイメージにとらわれることなく、マルティネスの発想は極めて柔軟。古典作品を上演するためのダンサーの期間雇用や、隣接するバレエ団(フラメンコ)とのコラボレーション、マドリッド市のコンセルヴァトワールとの連携を計画する等、減少する文化予算の問題を、柔軟な発想と類まれな実行力で次々にクリアしている、彼の芸術監督としての資質には、驚きの連続である。

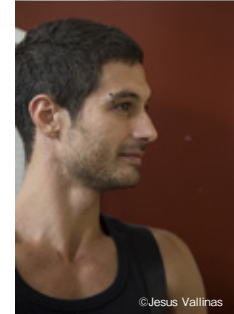
新たな建物や組織を作らずとも、そこに存在するものを組み合わせ、再活用することで、いかに豊かな空間や組織を創造することができるか。ダンサーたちの自発的なモチベーションと笑顔も、彼の3年間の成果とカンパニーの財産だろう。穏やかに、でも活気あふれるクリエイション現場にて、そのことを実感する貴重な2日間となった。



©Jesus Vallinas



ジョゼ・マルティネス芸術監督室



©Jesus Vallinas



衣裳室にて ©Jesus Vallinas



スタジオのエントランス

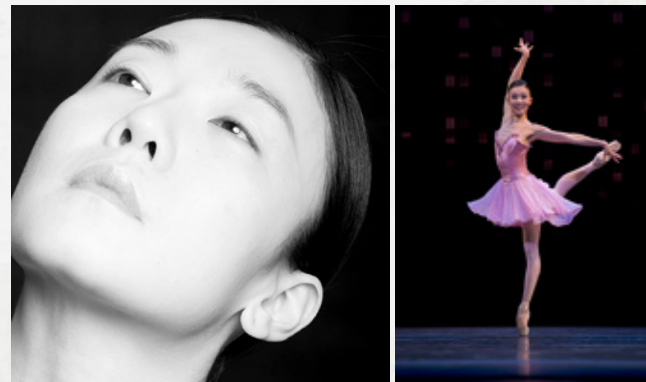
Principal DANCERS



Kayoko Everhart カヨコ・エバーハート

芸術監督としてのジョゼはすごく優しい人で、たまにシャイ(笑)。
彼にはダンサーの気持ちがわかるから、
いつも私たちと同じ目線で接してくれます。

東京生まれ。ワシントン・コンテンポラリー・バレエ・スクール、バンフィック・ノースウェスト・バレエのサマーコース、サンフランシスコ・バレエスクールで研鑽を積む。2002年にトゥルサ・バレエシアターに入団。2年後、ナチョ・ドゥアトが芸術監督を務めるスペイン国立ダンスカンパニー2に入団。スペイン国立ダンスカンパニーのジュニアカンパニーで踊った2年半のうちに、ドゥアト、トニー・ファーブルなど数々振付作品に出演。07年1月よりスペイン国立ダンスカンパニーに在籍。



Seh Yun Kim セ・ユン・キム

ジョゼはクラシックのテクニックに回帰しつつも、
新しいチャレンジをしている。
このカンパニーのレパートリーが魅力的だから、
私はここに来たんです。

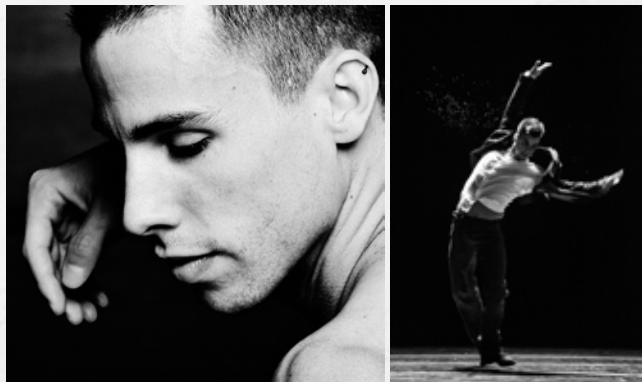
韓国・ソウル生まれ。ソウル・スン・ハ・アートスクール、ワシントンDCのキーロフ・アカデミーにて学ぶ。2001年ルクセンブルク国際バレエコンクール1位。02年プラハ国際バレエコンクール1位。ユニバーサル・バレエ団に入団。ボストン・バレエ団、チューリヒ・バレエ団、オランダ国立バレエ団でソリスト、プリンシパルとして活躍。クラシックバレエはもちろん、バランシン、キリアン、ドゥアトなどの作品にも出演。12年よりスペイン国立ダンスカンパニーに在籍。



Esteban Berlanga エステバン・ベルランガ

プリンシパルという位置にはプレッシャーが伴う。
でも、それと同時に「魅せたい」という
わくわくする気持ちもあるのです。

スペイン・アルバセテ生まれ。アルバセテ、マドリッドなどでバレエを学び、2006年イングリッシュ・ナショナル・バレエ団に入団。09年ソリスト、12年ファースト・ソリストに昇格。10年にはナショナル・ダンス・アワード及びブノワ賞にノミネートされる。クラシックからコンテンポラリーまで幅広い作品を踊るほか、モンテロ、ディーン、ドーソンなどの振付家の作品に初演キャストとして出演。13年よりスペイン国立ダンスカンパニーに在籍。



Javier Monzón ハビエル・モンソン

すぐに心を開いて、どんなことでも話し合える。
そして、どんなに大変な状況に陥っても、
必ず僕らを引き上げてくれる。
それがジョゼ。

スペイン・マドリッド生まれ。レアル・マドリッド・コンセルヴァトワールにて学ぶ。1995年ベジャール・バレエ・ローザンヌに参加。2003年スペイン国立ダンスカンパニーに入団。05年よりネザーランド・ダンス・シアターIIに、08年よりネザーランド・ダンス・シアターIに所属。この間にパイト、マクレガー、キリアン、マーネン、フォーサイスなどの作品を踊っている。10年、スペイン国立ダンスカンパニーにプリンシパルとして戻る。



Anthony Pina アンソニー・ピナ

このカンパニーでは、自分がどう踊ったらよいのか、
作品に自分をどうフィットさせるか、
ジョゼはその方法や道のりを提示し、
また一緒に模索しながら進めてくれるんです。

アメリカ・マサチューセッツ州ボストン生まれ。ボストンバレエ・スクール、ABT付属ジャクリン・ケネディ・オナシス・スクールなどを経て、2006年アルバータ・バレエ(カルガリー)に入団。ジャン・グラシ＝メートルに見いだされる。その後、ウィルダンの『真夏の夜の夢』バック、エドモンド・ストライプの『くるみ割り人形』王子、カーク・ピーターソンの『眠れる森の美女』ブルーバードなどを踊る。12年よりスペイン国立ダンスカンパニーに在籍。13年プリンシパルに昇格。



Alessandro Riga アレッサンドロ・リガ

今回のプログラムは、我々のカンパニーを知ってもらうための「窓」。
カンパニーとして我々がどこまでいけるのか、
その窓から見ていただければ、と思います。

イタリア・クロトーネ生まれ。ローマ歌劇場舞踊学校を経て、ゼンパーオーバー・バレエ団(ドレスデン)にてソリスト、プリンシパルを務める。2006年よりフィレンツェ五月音楽祭劇場にプリンシパル・ゲストダンサーとして参加すると共に、イタリアの主要な劇場にも出演。13年よりスペイン国立ダンスカンパニーに在籍。『ジゼル』『ラ・シルフィード』などクラシックから、ベジャール、ノイマイヤーといった現代振付家の作品まで、幅広い領域を踊りこなすダンサーである。

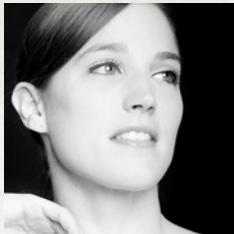


Lucio Vidal ルシオ・ヴィダル

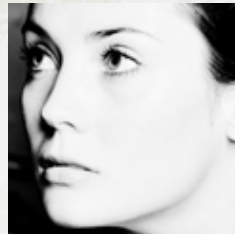
ジョゼが芸術監督になって、ダンスの種類が変容した。
変わることも、ジョゼと一緒に創り上げるという作業も、
ダンサーとしてすごくポジティブなことだと感じています。

アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれ。マリアノ・モレノ・スクール、マスター・スクール・オブ・イングリッシュ、フリオ・ボッカ財団バレエ学校等で学ぶ。その後、ブエノスアイレスのサン・マルティン劇場、フリオ・ボッカのバレエ・アルゼンチーノ、ブラジルのサンパウロ・ダンス・カンパニーなどに参加。バラシン、サープ、グラハムなど様々な振付家の作品を踊る。2010年よりスペイン国立ダンスカンパニーにプリンシパルとして在籍。

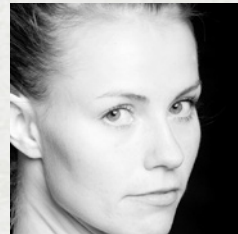
SOLOISTS



Noëllie Conjeaud
ノエリー・コンジョード



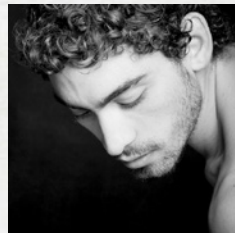
Jessica Lyall
ジェシカ・リアル



Emilia Gisladóttir
エミリア・ギスラドティル



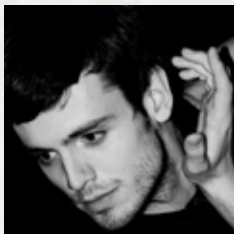
Natalia Muñoz
ナタリア・ムニョス



Antonio De Rosa
アントニオ・デ・ロサ



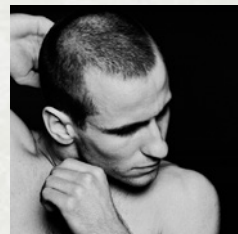
Francisco Lorenzo
フランシスコ・ロレンソ



Toby William Mallitt
トビー・ウィリアム・マリット

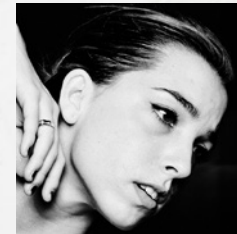


Aleix Mañé
アレックス・マニェ

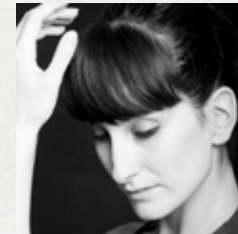


Daan Vervoort
ダン・ヴェヴォート

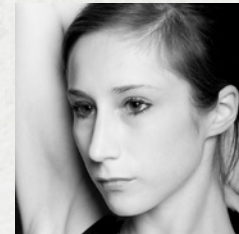
CORPS DE
BALLET



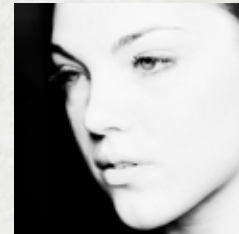
Mar Aguiló
マル・アギロ



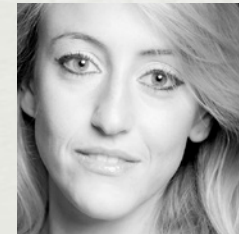
Aída Badía
アイダ・バディア



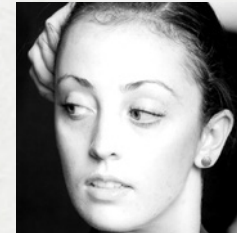
Lucie Barthélémy
ルシー・バルテレミー



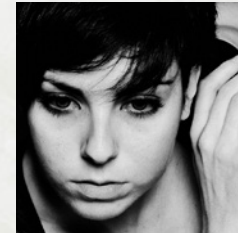
Elisabet Biosca
エリザベト・ビオスカ



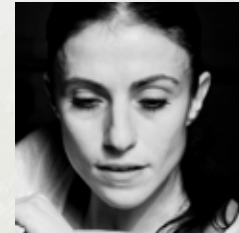
Eugenia Brezzi
エウヘニア・ブレッツィ



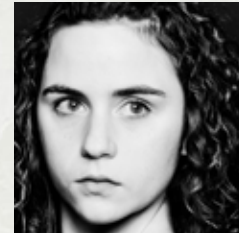
Rebecca Anne Connor
レベッカ・アン・コノール



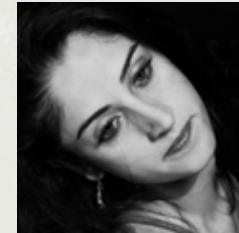
Sara Fernández
サラ・フェルナンデス



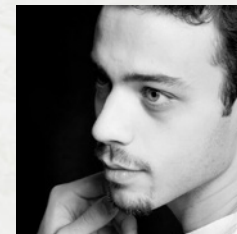
Agnès López
アグネス・ロベス



Allie Papazian
アリ・パパシアン



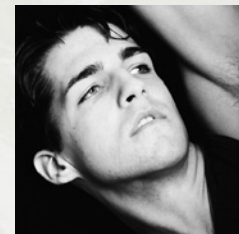
Nandita Shankardass
ナンディタ・シャンカルダス



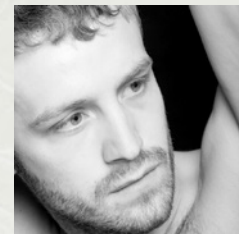
Jacopo Giarda
ジャコボ・ギアルダ



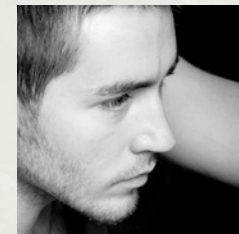
Erez Ilan
エレス・イラン



Álvaro Madrigal
アルバロ・マドリガル



Mattia Russo
マティア・ルッソ



Rodrigo Sanz
ロドリゴ・サンス

COMPañÍA NACIONAL
DE **DANZA** DE ESPAÑA

DIRECTOR ARTÍSTICO **JOSÉ CARLOS MARTÍNEZ**

Artistic Director: José Carlos Martínez

Executive Director: Daniel Pascual

Head of Administration: Alejandra Torremocha

Co-Artistic Director: Pino Alosa

Principal Dancers:

Kayoko Everhart, Seh Yun Kim, Esteban Berlanga,

Moisés Martín, Javier Monzón, Anthony Pina,

Alessandro Riga, Lucio Vidal

Soloists:

Noëllie Conjeaud, Emilia Gísladóttir, Jessica Lyall,

Natalia Muñoz, Yae Gee Park, Antonio De Rosa,

Francisco Lorenzo, Toby William Mallit, Aleix Mañé,

Isaac Montllor, Daan Vervoort

Corps de Ballet:

Mar Aguiló, Aída Badía, Helena Balla, Lucie Barthélémy,

Elisabet Biosca, Eugenia Brezzi, Rebecca Connor,

Sara Fernández, Nadia Kahn, Agnés López, Clara Maroto,

María Muñoz, Allie Papazian, Giulia Paris,

Nandita Shankardass, Aitor Arrieta, Jacopo Giarda,

Erez Ilan, Álvaro Madrigal, Benjamin Poirier,

Mattia Russo, Iván Sánchez, Roberto Sánchez,

Rodrigo Sanz, Joel Toledo

Ballet Masters: Stéphane Phavorin, Yoko Taira,

José Carlos Blanco, Cati Arteaga, Elna Matamoros

Artistic Coordinator: Jesús Florencio

Pianists: Carlos Faxas, Viktoria Glushchenko

Physical Therapists: Luis Aledo, Sara Álvarez

Masseur: Mateo Martín

Communication Manager: Maite Villanueva

Assistant to Communication Manager: José Antonio Beguiristain,

Production Manager: Sonia Sánchez

Production: Luis Martín Oya, Javier Serrano

Assistant to Executive Director: Amanda Pérez Vega

Activities Coordination: Esther Viñuela

Administration: Susana Sánchez-Redondo

Staff: Rosa González

Technical Director: Luis Martínez

Stage Managers: José Álvaro Cotillo

Stage Hands: Francisco Padilla

Electricity: Lucas González, Juan Carlos Gallardo,

José Manuel Román

Sound: Jesús Santos, Pedro Álvaro, Rafa Giménez

Wardrobe: Ana Guerrero, M^a del Carmen Ortega,

Mar Aguado, Cristina Ortega

Wardrobe Archive: Luisa Ramos

Properties: José Luis Mora, Francisco Javier Hernández

Storehouse: Reyes Sánchez

Concierges: Miguel Ángel Cruz, Teresa Morató

[舞台監督] 黒澤一臣 (OSK)

[大道具] 清水重光 (ACTIVE)

[照明] 本江加奈 (舞台照明 劇光社)

[音響] 本間篤志 (Kyoritz)／小宮大輔 (Kyoritz)

[国際輸送] 奥井義則 (ロック・イット・カーゴ・ジャパン)

[国内輸送] 山田実雄 (フォーバル)

[コーディネーター] 度会輪子 (ベルチェアソシエツ)

[宣伝美術] 柳沼博雅 (GOAT)

[協力] ユニ・ワークショップ／村上舞台機構

[プロデューサー] 唐津絵理 (愛知県芸術劇場)／林 美佐 (KAAT神奈川芸術劇場)

[制作] 吉安恵子 (愛知県芸術劇場)

横山 歩 (KAAT神奈川芸術劇場)／小沼知子 (KAAT神奈川芸術劇場)

[広報] 福島尚子 (愛知県芸術劇場)／久田絢子 (KAAT神奈川芸術劇場)

[技術統括] 世古口善徳 (愛知県芸術劇場)／堀内真人 (KAAT神奈川芸術劇場)

[企画制作] 愛知県芸術劇場／KAAT神奈川芸術劇場

[協賛] チャコット株式会社／Rivera Japan (株式会社リベラジャパン)／Sant Aniol

[協力] ベルチェアソシエツ

[後援] スペイン大使館

愛知公演

[主催] 愛知芸術文化センター愛知県芸術劇場 (公益財団法人愛知県文化振興事業団)

[共催] 中日新聞社／東海テレビ放送

[助成] 平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

神奈川公演

[主催] KAAT神奈川芸術劇場



PROGRAM STAFF

[デザイン] GOAT [編集] 石井三保子 [印刷] 有限会社アベ印刷

[発行] 愛知県芸術劇場／KAAT神奈川芸術劇場 [発行日] 2014年11月30日

〒461-8525 愛知県名古屋市中区東横一丁目13番2号 Tel.052-955-5609 <http://www.aac.pref.aichi.jp>

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281 Tel.045-633-6300 <http://www.kaat.jp>

DANCE CUBE

KACHIDOKI

バレエの美しさと健やかなライフスタイルが
まるごと体感できる、新しい複合商業施設
「ダンスキューブ 勝どき」。

施設内にはバレエ・ダンスショップ「チャコット勝どき店」と
「チャコット・ダンスキューブ 勝どきスタジオ」、
さらに“おいしく食べて、しっかり身体をつくる”が
テーマの「ダンスキューブ・カフェ」などが。

見て・参加して・食べて・楽しめる!をぎゅっと閉じこめた、
いつでもバレエ・ダンスに浸れる新しいスポットが、
2014年11月にオープンしました!



バレエ・ダンスの
総合ショップ
チャコット勝どき店



トップクラスの講師陣
による多彩な講座
チャコット・ダンスキューブ
勝どきスタジオ



おいしく、しっかり食べて、
健やかな身体をつくる
ダンスキューブ・カフェ

街の自転車ステーション
サクラ



ダンスキューブ勝どき 〒104-0054中央区勝どき4-13-4

■チャコット勝どき店
TEL.03-6221-2271
営業時間／11:00～19:00 年中無休(年末年始を除く)
■チャコット・ダンスキューブ勝どきスタジオ
TEL.03-6221-2273
営業時間／9:30～22:00 年中無休(年末年始を除く)
■ダンスキューブ・カフェ
TEL.03-6221-2276
営業時間／11:30～23:00 年中無休(年末年始を除く)
■サクラ勝どき店
TEL.03-6221-2275
営業時間／11:00～21:00 年中無休



Chacott www.chacott-jp.com
三井不動産レジデンシャル 「ダンスキューブ勝どき」は、施設パートナーである
三井不動産レジデンシャル(株)との協働事業です。

